第 58 回いそご文化資源発掘隊
「赤い靴」と「青い目の人形」
～2 つの童謡がつなぐ横浜物語～

開 催 日 ２０２２年１１月２４日（木）
開催時間 １４：００～１６：００
会　　場 杉田劇場リハーサル室
参 加 者 ４２名
ゲ ス ト
松永 春さん
（赤い靴記念文化事業団 団長）
海老原雅司さん
（口笛奏者：2022 年口笛世界大会３位入賞）
司会進行　清水一徹（杉田劇場職員）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
清水　本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。第１部ではこの２曲の童謡にまつわるエピソードや人物についてお話しします。

その後、口笛世界大会で第３位に入賞するなど、口笛の世界で国際的に活躍している海老原雅司さんの口笛パフォーマンスをお聴きいただきます。

第２部では山下公園の「赤い靴はいてた女の子像」の建立に奔走した赤い靴記念文化事業団団長の松永春さんをお迎えし、当時のお話を中心に伺います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

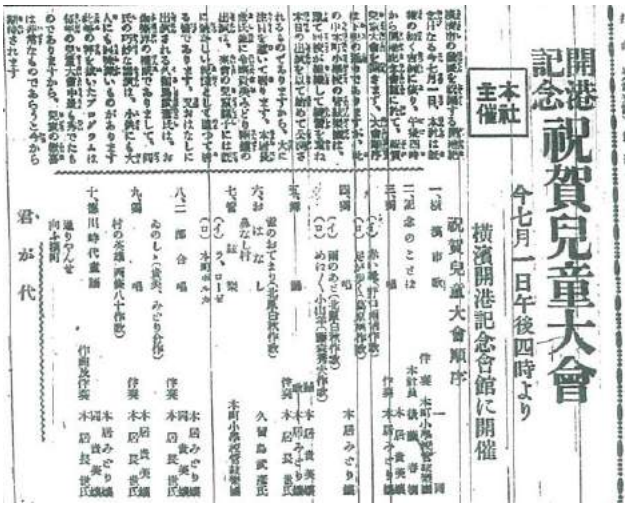
第１部

今回のテーマのきっかけとなったのは、当館スタッフが見つけてきた新聞記事。

「横浜貿易新報」大正１２年７月１日号、首都圏に壊滅的な打撃を与えた関東大震災の２か月前の記事である。

横浜貿易新報の主催により横浜開港記念会館のホールにて開催された「開港記念祝賀児童大会」という演奏会。

現在、新聞記録で確認できている範囲で、これが初めて『赤い靴』をプログラミングしたものとなっている。


開港記念祝賀兒童大會
今七月一日午後四時より
横濱開港記念會館に開催
本社主催
祝賀兒童大會順序

野口雨情

『赤い靴』の作詞は野口雨情で、本名は英吉という。明治１５年５月２９日に、今の北茨城市磯原にて生まれた。

彼は鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍した名将、楠木正成の弟である楠木正季の子孫と伝えられている。また、雨情の大叔父は幕末の尊王攘夷派の志士として知られる西丸帯刀である。彼は水戸藩の郷士として、若き日の桂小五郎らとの交流があった。

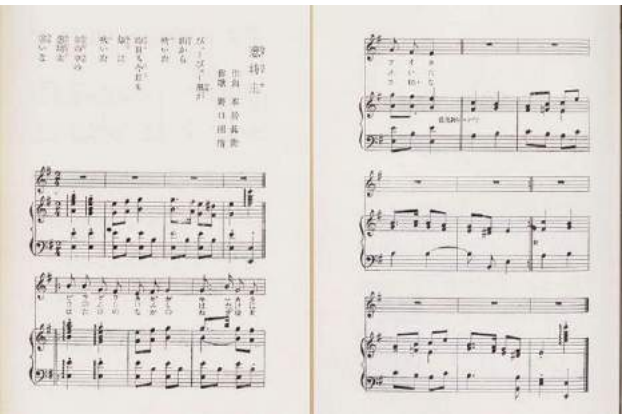
本居長世

そして、作曲者は本居長世。明治１８年４月４日、東京府下谷区（現在の東京都台東区）御徒町にて生まれている。

彼は国学者の本居宣長の子孫で、幼き日に母を亡くし、養子だった父も家を出た結果、同じく国学者である祖父の豊穎（とよかい）に育てられた。

雨情と長世の出会いについて。大正８年に童謡雑誌『金の船』（大正１１年に『金の星』へ改め）を創刊した斎藤佐次郎が、西條八十の紹介により雨情と出会ったところから始まる。

翌年に雨情は『金の船』編集部員として迎えられるが、作曲家の中山晋平の紹介により、佐次郎が長世と会ったおり、雨情が書いた「葱坊主」の詞を持ち込んだところから、彼らのコラボレーションが始まったのである。



上の楽譜は『金の船』に掲載されたときのもの。興味深いのは曲の調性で、「青い眼の人形」の中間部と「赤い靴」でも使われた短調、とくに「青い眼の人形」とは同じホ短調なのである。

既に長世の童謡に対する美学の片鱗が見て取れるが、当時この作品は今一つ話題にならなかったようである。

雨情と長世のコンビは、『金の船』で同年９月号にて発表された「十五夜お月さん」が、１１月２７日の「新日本音楽大演奏会」（於有楽座）で演奏され、みどりの歌が脚光を浴びたことで一躍話題になった。

そして大正１０年１２月は、彼らにとって大きなターニングポイントともいえる時となった。

『金の船』１２月号に「青い眼の人形」が掲載されたのだ。どこか愛らしい女の子の人形が描かれている。

今回のイベントタイトルの「青い目の人形」という表記だが、『金の船』の目次では「眼」となっているのに対し、楽譜と歌詞では「目」と表記されているので。今回はこちらを踏襲している。

その後、雨情が書いた童謡集『青い眼の人形』(金の星社)では、大正１３年６月１日発行の際に「眼」の字で書いたことで、現代ではその表記がスタンダードになっているが、小松耕輔編『世界音樂全集第１１巻　日本童謡曲集』昭和５年１１月１５日発行(春秋社)では再び「目」で表記されている。その辺りはその後の出版楽譜からも、作曲者側のこだわりでは、とも言われている。

さらにこの楽譜、拍子が４分の２拍子、現在は４分の４拍子に変更されているのだ。大正１１年５月１５日発行の『本居長世作曲　新作童謡』第五集(敬文館) の楽譜で拍子が代わったようだ。

皆さんのイメージでの「青い目の人形」は、洋服を着た少女のイメージかと思うが、実際はこのキューピー人形が、雨情の書いた「青い目の人形」の歌詞にインスピレーションを与えたそうだ。

当時、三女の香穂子がこの人形を可愛がっていた姿を見たことがきっかけと伝えられている。

後世では、その後の昭和２年に行われた日米の「友情人形」交流のイメージが繋がりがちなのだが、歌詞が書かれた当時の日本でも人気だった舶来の人形といえば、このキューピー人形だった。

ちなみに歌詞の中にもあるとおり、この人形も

セルロイドで作られている。

さて、本居長世にとって、その音楽活動の中期において大きく貢献したのが自身の娘である三姉妹だった。右から長女のみどり、次女の貴美子、三女の若葉。

みどりは童謡歌手の第１号として大きな脚光を浴び、それに続く貴美子と人気を二分した。貴美子の５つ下にあたる若葉は三姉妹の中でも最も長生きし、詩人の菱山修三に嫁いだのち、９２歳で亡くなるまで長世が残したものを世に広め続けた。

本居みどりは、大正９年１２月２日に開港記念会館にてソロデビューをしたと、松浦良代さんの書いた伝記『本居長世―日本童謡先駆者の生涯』には記されている。

横浜貿易新報の記事にもなり、長世のスクラップブックに残されているとのことだが、同年１１月および１２月の本紙にはその事実が見受けられない。

この時は雨情と長世の大ヒット作となった「十五夜お月さん」、そして「青い眼の人形」がプログラミングされ、音楽に合わせて舞踊も付けられるなど、当時としては極めて画期的な内容となっている。これらの活動が、当時の童謡ブームへの普及に大きく貢献したといえるだろう。

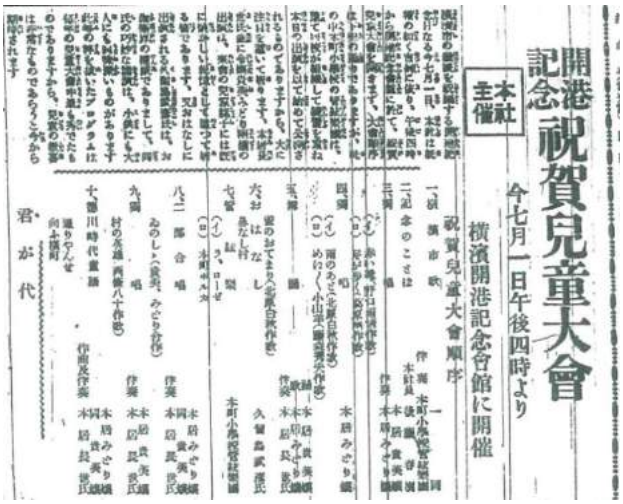
さて、冒頭の話に戻るが、「赤い靴」の公開初演の地は横浜だったのか？ということだが、これは現状で確認できている資料は、この「横浜貿易新報」のみである。

当時、本居長世が出演した演奏会の記事も、読売新聞など他の新聞社に幾つか見られたが、少なくとも都内をはじめとする首都圏では確認ができない。

一つ言えることは、横浜以外の地でこの演奏会より前に「赤い靴」を歌った記録は見つかっておらず、その後の渡米楽旅ではプログラミングされたものの、どうやらかの地で「赤い靴」はいささか暗い曲調ということもあり人気がなかったようだと、弟子である金田一晴彦執筆の伝記には書かれている。

そのせいか、現在確認できている以後の演奏会記録にも、『赤い靴』は見受けられない。

この謎について今後も追っていきたいと思う。


開港記念 祝賀兒童大會

本社主催

今七月一日午後四時より

横濱開港記念會館に開催

祝賀兒童大會順序

君が代

今回の企画を立てるにあたり、野口雨情の生まれ故郷である北茨城市磯原に行ってきた。

実はこの磯原は横浜ともゆかりの深い人物が関わっている。

駅前の「からくり時計」。雨情が作詞した「シャボン玉」「七つの子」「青い目の人形」３曲を一日７回演奏する。演奏時間は９時・１２時・１４時・１６時・１７時・１８時・１９時でそれぞれ３分間。

時計塔のデザインは、晩年を北茨城市の五浦（いづら）で過ごした岡倉天心が思索にふけった庵、六角堂をかたどっているとのこと。

天心は横浜市、今の開港記念会館の近くで生まれており、雨情と同じく、生まれた地と晩年を過ごした地が海に近い場所という点でも興味深い話である。

磯原海岸の入口には３つの碑が並んでいる。

左は徳川斉昭公の歌碑、右は茨城百景の記念碑となっているが、注目すべきは真ん中の「磯原節」の歌碑である。

「磯原節」は野口雨情作詞、藤井清水（ふじい・きよみ）によって昭和元年に作曲されたもの。

藤井は雨情と大正１２年に大阪で知り合ったとのことで、大正８年には『金の船』で作品を発表するなど、童謡の世界でも活躍。また、浪曲の節回しにピアノ伴奏を付けた「楽浪曲」というスタイルを生むなど、邦楽と洋楽的要素の融合という点では、本居長世や宮城道雄とも共通するものが感じられる。

北茨城市歴史民俗資料館。入口の左右に立つのは「しゃぼん玉」像。左は男の子。右は女の子になっている。

そして、真ん中に鎮座するは野口雨情のブロンズ像で、右手にペン、左手に小さなノートを持つ姿が印象的だ。

そして、この地にはさらに印象的な歌碑が２つある。横浜にも縁の深い作曲家、高木東六のもの。彼が残した話によると、「父はロシア正教会の伝道師でした。任地の関係で茨城の小さな漁村に移って、僕も六歳頃に磯原というところに移りました。その頃は教会のオルガンを弾いて遊んでいました」(『有鄰』第 413 号　平成１４年４月１０日発行)

その人生を終えるまで住み続けた横浜との繋がりが、ここにもあったのは非常に興味深い話。

雨情の詞に、高木東六が作曲した「かもめ」の歌碑。作曲者本人の筆による、文章と楽譜の一節が刻まれている。

こちらも高木東六の書による『磯原小唄』の歌碑。

なお、こちらは雨情の歌詞で、作曲は藤井清水によるものである。

野口雨情の生家

中は撮影禁止とのことで詳細な写真は撮っていないが、このような雰囲気で、畳敷きの部屋には家系図や貴重な写真、手紙などの資料が展示されている。

さて、ここからは、横浜における「赤い靴」と「青い目の人形」の今昔アイコン巡りをご覧いただこう。

これは「横浜人形の家」。昭和６１年、山下ふ頭近くの観光バス駐車場の跡地に建設され現在に至っている。

青い眼の人形「エレナ」はこちらの所蔵で、その返礼としてアメリカに渡った市松人形もこちらに展示されている。

そして、雨情が見たものに近い、当時のローズ・オニールによるキューピー人形も展示されている。

その「横浜人形の家」の２階からの入口にある「青い目の人形像」。

言うまでもなく、こちらはアメリカから日本に送られた人形のイメージで作られている。

モデルは現在、西区にある西前小学校に保存されている２体の人形のうちの一つ「ポーリン」である。（もう一体は「マーリン」）

ちなみに、山下公園から「横浜人形の家」をつなぐ歩道橋、こちらの通称は「ポーリン橋」となっている。

横浜開港資料館が所蔵する明治４３年頃の横浜港の大さん橋付近の様子。

雨情には実の兄弟のように仲が良かった野口茂吉という従弟がいたが、彼は明治３８年、この横浜港から渡米していった。そして、その後の消息は長らく不明だったのだが、ロサンゼルスにて昭和２９年に死去したとのこと。

その実体験と心象風景は、「赤い靴」の歌詞を書く際、横浜をイメージするのに大きく繋がっていったと考えられる。

なお、雨情が横浜を訪れた記録は見つかっていないのだが、「青い目の人形」と「赤い靴」以前に横浜に訪れていたとしたら、『金の船』編集部で働くために再度上京した大正９年前後ではない

かと推察される。

港の見える丘公園にある通称「フランス山」。その石畳にはハートの形をしたものがあるのは割と有名なのだが、実は「足跡」のようなものも…しかも、「赤い靴はいてた女の子」像の方角を向いている。

これはきっと「赤い靴」をイメージしたものに間違いない。

山下公園周辺の歩道で見られる絵タイル。船、市の鳥であるカモメとともに赤い靴があしらわれている。

さらにこちら、税関前の歩道に埋め込まれた絵タイル。ここには８枚もの赤い靴が埋め込まれている。

大正時代、北米航路の船は新港ふ頭から出航していた。その新港ふ頭は税関の裏側にある。

そんなこともあって、この歩道に多くの赤い靴をはめ込んだのではないか。

これはもう過去のものになるが、「ニューミナトケッチン」の左側の建物が、かつて中華街にあったクラブ「レッドシューズ」。

ちなみに今では、ネットで検索してもいわゆるキャバクラの店名でしか引っかからないが、かつて西門通り沿いにあったお店で、現在は「ウインドジャマー」というジャズカクテルラウンジとなっている。

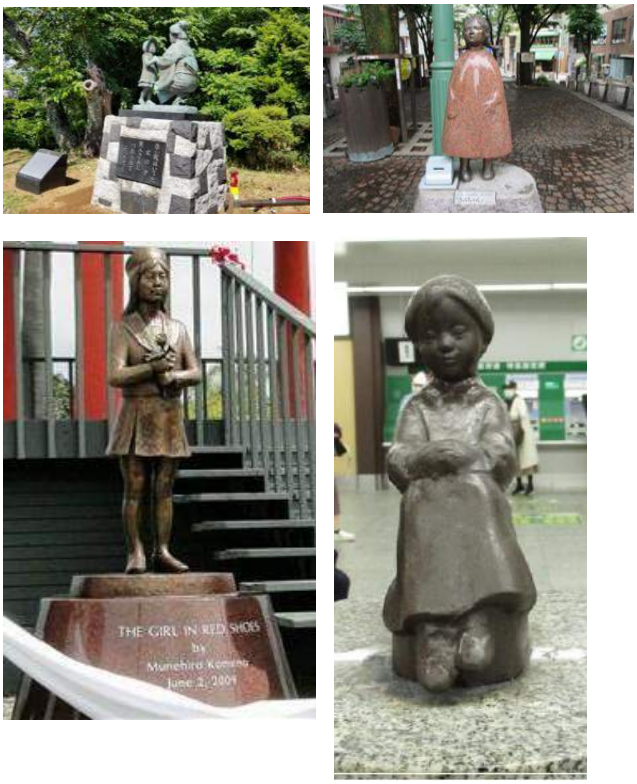
こちらの写真は取材のおりに、日本大通りで偶然鉢合わせた、新たな「赤い靴はいてた女の子像」！

横浜ユーラシア文化館の主催事業である「第３回横浜ユーラシア スタチュー・ミュージアム」なるものの、人間彫刻とのこと。精巧に出来ているが、実は人間そのもの！

さて、ここからは全国の「赤い靴少女像」。

全国にはこれだけの「赤い靴」に絡んだ像がある。

左上：北海道小樽運河公園
右上：北海道留寿都村赤い靴公園
左下：青森県鰺ヶ沢海の駅わんど
右下：北海道　函館西波止場前

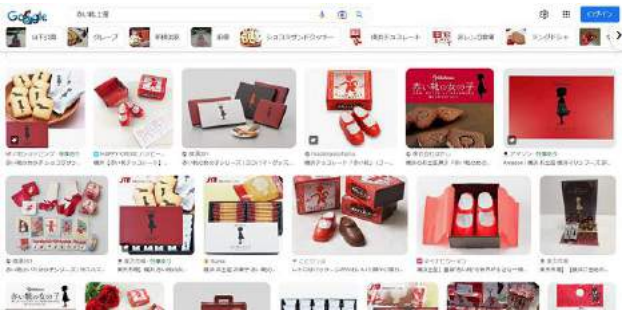


左上：静岡県静岡市　日本平
右上：東京都港区麻布十番
左下：アメリカ　サンディエゴ
右下：JR 横浜駅　中央通路

実は山下公園のもの以外はすべて、菊池寛の著書で「きみちゃん」の話が発表されて以降に作られている。

そういった点でも、松永さんの運動はこれらの先駆けとなったものといえる。

「赤い靴」をテーマにしたお土産、というのを当館スタッフが検索してみたところ、驚くべきことにあれだけ全国に「赤い靴少女像」があるのに、お土産は横浜のものばかりが検索に引っかかったという。



検索結果はすべて横浜のもの

赤い靴チョコレート、中身はちゃんとチョコレートの色をしている。赤い靴下、これを履くと「赤い靴」を履いているように見えるしろもの。

これらはマリンタワー２階のショップで売っている。

先の「レッドシューズ」のほか、「赤い靴」の屋号を持つお店は現在も、ちらほら見られる。

最後に「あかいくつ」の名を関した乗り物を紹介する。

観光船「あかいくつ」は、現在では「マリーンルージュ」号となっている。

なお、バスの「あかいくつ」だが、なんとすべての車両のナンバープレートが「１５０」となっている。これはどうやら、このバスの運用が始まったのが開港１５０周年記念の年ということで、そうなったようである。

発掘隊特別ステージ

口笛による名曲特集

口笛演奏：海老原 雅司

The 45th World Whistlers Convention（WWC）
第45回口笛世界大会　第3位入賞
2018年2月20日放送「マツコの知らない世界」出演 など

第２部の前に特別ステージを用意した。今年度の口笛世界大会で第３位に入賞し、テレビ番組「マツコの知らない世界」でその高速演奏が話題になった、口笛奏者の海老原雅司（えびはら・まさし）さんによる口笛演奏。

海老原　今日は童謡がテーマということなので、古い曲などを用意しました。

口笛を吹く方は日本には多いです。私は第３位ですが、世界チャンピオンになっている日本人も何人かいらっしゃいます。

それでは、オープニングとしてこの曲をお聴きいただきましょう。

【演奏】スポーツショー行進曲（古関裕而作曲）

今日は「赤い靴」がテーマということなので、横浜ならではの童謡を吹かせていただきます。

【演奏】赤い靴

こんな感じで伴奏に合わせたり、あるいはアカペラで吹いたりしています。

夜に吹くと蛇が出るとか言われちゃいますが、やっぱり音を高くすると遠くまで聞こえてしまいますので耳障りということもあるのだと思います。

では、次の曲を。

【演奏】青い目の人形

横浜らしい童謡ということでもう一曲。「カモメの水兵さん」をお聴きいただきます。作詞した方は大さん橋に飛んできたカモメをイメージでいて作られたそうです。

【演奏】カモメの水兵さん

昔、この近くにあった旧杉田劇場から美空ひばりさんなどが飛び立ったということで、こちらの区民文化センターではその名称を継承していますので、今日は美空ひばりさんゆかりの曲をお聴きいただきます。

【演奏】愛燦燦

口笛で世界大会に出ていると、いろんな方がいらっしゃいます。まず音域ですが、この大会に出てくる方はだいたい３オクターブくらいです。私は３オクターブ半くらいですが、高い方は４オクターブくらい出しています。

口笛は吹いていると息が続かなくなるのです。そこで、吸いながら吹くというのがあるんです。

≪ここで両方を実演≫

さて、美空ひばりさんの曲ということでもうひとつ。私も最近知ったのですが、ジャズとかも歌っていらっしゃるんですね。

英語は喋ることはできなかったのですが、非常にきれいな英語で歌っています。そんなひばりさんが歌っていたジャズナンバーから「スターダスト」をお聴きください。

【演奏】スターダスト

先ほどのご紹介のなかで、「マツコの知らない世界」に出演したという話が出ましたが、私たち口笛界では大会を盛り上げようということで、いろいろな人が各メディアに出るようになりました。

そのうちの一つが「マツコの知らない世界」だ

ったのですが、私はしっとりした曲とかではなく、技術的なところで紹介されました。その時に吹いたのがモーツァルトの「トルコ行進曲」でした。

これはジャズピアニストがアレンジしたジャズ風のものです。

【演奏】ジャズ風トルコ行進曲

世界大会には６５歳以上の方が出場できるシニアの部もありますので、我こそはと思う方は出てみたらいかがでしょうか。

それでは最後に、戦前の藤山一郎が歌ってヒットした「丘を越えて」を演奏します。

【演奏】丘を越えて

第２部

第 2 部はゲストに赤い靴記念文化事業団の団長松永春さんをお迎えし、みなと横浜のシンボルといえる「赤い靴はいてた女の子像」の建立にまつわるエピソードを伺った。

また、女優で「赤い靴はいてた女の子像」キャンペーン委員長の沢田雅美さんも司会も務めた。写真右は松永春さん。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

清水；それでは松永春さんをご紹介します。

松永：みなさん、こんにちは。松永春でございます。杉田劇場のお二人に、これだけ素晴らしい資料を作ってもらって、私の出番は必要ないんじゃないでしょうかね。お弁当を食べさせてもらったので、これで帰ってもいいのかと……

清水：いえいえ、まだこれからですよ。まずは松永さんと赤い靴の出会いについてお話を伺いたいと思います。

松永：私にも子供の時代がありましてね、まだできたばかりの頃の幼稚園に通っていました。そして今年、93 歳になります。あと数か月で 94 歳になります。こんな老人になると、普通は家にいるか、または杖を突いてこういう所に来るかですけど、こうしてマイクを持って人様の前でしゃべるなんて、ほとんどいないんじゃないでしょうかね。どうしましょうか。

私は先ほど申し上げた幼稚園に行っておりましたが、そこは教会がやっていまして、園児が 13 人いました。そこに外国人の牧師さんとアシスタントの牧師さんがいたのですが、そのアシスタント牧師さんが「赤い靴」が好きだったんですね。

昨年、この「赤い靴」と「青い目の人形」が作られて 100 年でした。幼稚園では毎日、この歌をうたうんですね。もう、歌といったらこれしかないような感じで。

でも園児には難しかったので、みんな「異人さん」というところを「いい爺さん」と歌っていました。私は「ニンジンさん」と言っていました。赤い靴もニンジンも赤いのでね、私は文句も分からなかったのでね。最後には先生が「ニンジンじゃないよ、いじんさんだよ」と教えてくれました。

当時、悪いことをすると警察につれていかれるのですが、横浜では「異人さんに連れられて行くよ」と、よく母親に言われていました。横浜には

これだけ多くの外国人が住んで仲良くしているのに、そう言われたんですね。

なぜかというと、異人さんは子どもをさらって、玉乗りとか綱渡りとかやるサーカスに売っちゃうんだと。怖いですよねぇ。

幼稚園の先生は毎朝、劇をやるんです。「赤ずきんちゃん」とか「桃太郎」とか、毎朝、毎朝やるんですよ。５分くらいの短いやつですけど、自分で脚本を書いてね。

私は今、ミュージカルとかそういった仕事をしておりますけど、あの時の先生のおかげかなと思っております。

「赤い靴はいてた女の子」像を作ろうと思ったのはおとなになってからです。なぜかというと、横浜開港１００周年記念でマリンタワーをつくったり、氷川丸を公開したりしています。それで横浜は観光地といわれていますが、この二つだけで観光地といえるのかなと思ったからです。山下公園も観光地だといいますが、もっといい公園もあるし。これじゃあ、寂しいなと、のちのちはみなとみらいに色々できましたが、その当時はそういうふうに思っていたわけです。

横浜少年少女合唱団

そこで「赤い靴はいてた女の子」像をつくろうと思い、友だちなどに声をかけ１０数人のグループができあがり横浜市の緑政局の方に行ってきました。そして局長にお会いしてお願いしたところ、「それはダメだ。公園内には建てられない」と言われました。「作りたいなら、1坪くらいの土地を借りてやったらどうですか」と。

山下公園の中にはいろいろなものが建っています。「ガールスカウトの像」があります。私もボーイスカウトやっておりますが、別に敵ではありません。そこの会長が内山県知事の奥さんだったんですね。建立したときのお話を伺ったら、「提案したら次の月にはＯＫになった」というんです。

ほかに「リカルテ将軍の碑」もありまして、この人はフィリピン独立の父なのですが、これは誰から申請が出ていたのか調べると、日比協会の会長だった岸信介元総理大臣なんですね。それもなんの問題もなく建てられているんですね。

あとはインドの水塔がありますね。あれは関東大震災で、横浜在住のインド人が多数被災しましたが、その救済のために横浜市民が尽力したその感謝の意味で在日インド人協会が建立したものです。

そんなこともあって、ある人が「もっと地位のある方、議員さんとかに相談したらどうですか。それでもダメだったらあきらめるか」と言われたのですが、そういうのは一切使いませんでした。それから新聞社などが取り上げてくれて、「もういいだろう」ということになり、作家に像の制作を頼みました。

受けてくれた作家が一応、像を作ることになり、その前に「こういうのを作る」ということで新聞に出したのですが、その女の子は髪が短くて、鳩を持っている姿でした。それに対し、髪が短いと風にそよぐ感じがしない、鳩はフンも多くて公害のイメージがある、そんな意見もあって出来あがったのが、今の像です。

資金集めも大変でした。キーホルダーを作ってくれた人がいて、それをチマチマ売ったりしていましたが、像を建てるには１，２００万円くらいかかるんですね。それで、像のミニチュアを作って、寄付してくれた人にプレゼントすることにしました。１万円寄付してくれたら１体差し上げるということで、９９９体作りました。

あっという間に９９９万円の寄付が集まり、お

かげであの場所に建てることができました。

私が旧制中学に入った時に戦争が始まったんですね。最初は良かったのですが、３年くらい経つと、これからは学業は終わり、みんな軍需工場に行って働くことになりました。私は働くのは嫌ではないのですが、工場の旋盤の前でずっとやっていくのは嫌です。子どもの頃から飛行機が好きで、飛行機に乗って落とされて死ぬのは構わない。

１４歳で入れる飛行学校はないかと探したら、すぐにあったんですね。東京陸軍少年飛行兵学校です。そして陸軍省から厚い書類が届き合格になりました。そしたらもう一回試験があるというので立川に行きました。そこで操縦、通信、整備に分かれるのですが、私はおかげさまで操縦の方へ行きました。そこで一生懸命に訓練をしていました。

みんなで共同生活している中、誕生日になるとお祝いでリンゴを１個くれるんですね。その代わり何か一曲歌わなければなりませんでした。そこで私は「箱根八里」を歌うことに決めていました。そしたらね、藤沢出身のヤツがいて、それが歌っちゃったんですよ。(笑)

同じ歌を歌うわけにはいかない。そこで考えて、「赤い靴」を歌いました。「異人さんに連れられて行っちゃった～♪」なんていう歌詞があるわけですが、軍隊で歌うんですからすごいですよね。

そしたら班長が来て、「あとで隊長のところに来い」と言われちゃったんです。そこで隊長のところへ行ったら、「お前、あの歌を真面目に歌ったのか？」と言うんですね。私は「はい、真面目に歌いました」と答えたら、竹刀を持ってきて両腕をバンバン打たれてしましました。実は前日に4 種混合というワクチンを打たれていて、腕はパンパンに腫れていたんです。そんなひどいときに打たれたんですから、もう涙も出ませんね。

そして「ごめんなさい。大変な歌を歌ったと思います」と言って謝ったんです。そしたら「分かったんならいい」と言うんです。打った後から「分かったからいい」と言うんです。

そして次の日。那須の飛行場にいたら空襲がありました。松の木の間に飛行機を隠していたんですけど、飛行機なんて上からすぐ見えちゃうんですよ。兵隊は飛行機の下に隠れるから、それを撃ってくるわけです。

私も下にもぐって隠れたのですが、一緒に逃げた子がいました。そこで私が「伏せろ！」と叫ぶとダダダダッと撃ってきてすごい煙が立ちました。後ろを見たらその子の顔が血だらけでした。私のズボンにも血が流れているんです。結局、その子は死んでいました。

そしてお通夜をやろうということになり、例の隊長が言うんです。「おい、松永、この前歌った赤い靴を歌え」と。そこで私はその子の傍で「赤い靴～履～いてた～♪」と静かに歌ったんです。そしたらみんな、泣き始めるんです。みんな寝ないで朝まで屍の傍にいました。

隊長が私のところに寄ってきて、「この前は悪かったな。この歌はぴったりだ。異人さんに連れられて行っちゃったな」と言うんです。意味わかんない。

今度は頭を撫でてくれるのかと思ったら、そんなことはない。(笑) ま、軍隊というのはそんなところなんですよね。

それほど私は「赤い靴」が好きだったのかもしれません。もしかしたら、それしか歌えなかったのかもしれませんが。しかし、おかげさまで昭和５４年１１月１１日に、あそこに赤い靴の像を建

てることができました。４３年前です。私はまだ５０歳でした。

私は横浜文化賞を頂いたことがあるんですけど（平成２８年)、像を建ててからその時までに、山下公園に何人くらい来ているのか計算したことがあるんです。1 億4千万人も来ているんですね。何回も来ている人もいるし、女の子の像を見ない人もいるので話半分としても７千万人は来ていると思います。そこで私はいいことしたんだなぁ、と自分で思いました。

また、少年少女の赤い靴ジュニアコーラスをつくり、それに続いてザ・シワクチャーズ横浜を立ち上げました。６０歳以上の女性で、６０人ではなく６００人も集まったんです。世界最大のコーラスになりました。

でも、みんなで同時に歌うと輪唱みたいになっちゃうんです。一人の指揮者じゃダメなんですよ。その後は１４０人くらいになりましたが、世界中を回っています。１５か国くらい。イタリアには６０人で行きました。1ドル８０円台の時代でしたから、行くとコートを買ったりね。

それからミュージカルも１６回やっています。テーマは全部横浜のことです。１００人くらい出て有名になりましたけどね。子どものミュージカルは現在も続けています。

大晦日には元旦の朝まで「赤い靴の像」の前で歌を歌っています。

「赤い靴はいてた女の子」像の建設に支援してくれた４２，９９２名の名簿をプラスチックのケースに入れて像の下に埋めました。いつも感謝しています。

この日は、「人魚姫像」のデンマーク、「小便小僧像」のベルギーの大使館関係者も参列し、大きな盛り上がりを見せました。

世界の３大メルヘン像というのがあります。デンマークには人魚姫、オランダには小便小僧、そして横浜には赤い靴の履いてた女の子。これから皆さん、こういう言い方をしてください。

テケテケテケの寺内タケシさんとブルージーンズですが、実は私はこの人に頼んではいなかった

んですよ。強引にやって来たという感じです。

そしてやぐらを組んで舞台を作ってしまったのです。

公園には電源もないから司会はメガホン式のマイクでやることを考えていたのですが、そのことが、どこでどう漏れたのか、彼らは電源車を持ってきて、マイクもたくさん付けてくれました。

左:本居長世の三女　本居若葉さん
右:除幕式当時60歳

野口不二子さん　除幕式当時36歳、現在79歳

清水；出来あがってからの苦労はいかがでしたか？

松永：靴がペンキで紅く塗られていたり、唇が真っ赤に塗られていたり…。ペンキはなかなか取れないんですよ。

それからね、像の手の部分が凹んでいるので、そこにお金を入れていく方が多いんですね。お賽銭ですかね。拝んでいく人もいます。ここにお金を入れると海外いけるとか。

あの頃は公園にまだホームレスがいたんですが、像のうしろにずいぶん並んでいるなと思ったら、そのお賽銭を入れる、取る、入れる、取る…その順番待ちでした。(爆笑)

ほかにワンカップも置いていく人もいました。みんなで輪になって呑んでいました。(笑)

それでなるべく早く回収するようにして、結局２５万円くらい集まりました。シルクセンターの郵便局に口座を作ったんです。名前は「山下公園」と書いて「やました　きみえ」です。

そのことが新聞に載って郵便局から「架空の名前はダメだ」と言われて、結局、横浜駅に小さな「赤い靴はいてた女の子」像を作るための資金とさせていただきました。

清水；ちなみにこれは１１月に行った時の撮影ですが、ネックレスを付けられていました。これなら可愛いですけどね。

松永；こないだ行ったらね、白いマスクをつけている男の人がいたんですよ。この像は滑るんですよ。だからマスクをつけにくいんです。

それで「何やっているんですか」と聞いたら、「いま強いテープを買いに行っているんですよ」と言うんです。(爆笑)

そして「この公園の方ですか」と聞かれたんで、「いや、私はこの像を建てた者ですよ」と答えると、「逃げろ～」って言って、逃げていきました。(爆笑)

そのままにしておいたんですけど、そしたらね、次の日、掃除のおじさんが来て、「これじゃあ息ができないじゃないか」と言ってマスクを捨てたんです。マスクをつけた人も、捨てた人も、両方ともいいですよね、人間だなぁと思いました。

清水；１１月に見に行ったときはネックレスがつけられていましたが、その後、無くなっていたので公園管理者が外したのかなと思います。
ネックレスを付けられることは多いんですか。

松永：あそこはガーデンネックレスといいますからね（爆笑)。多いですよ。

寒いときは毛糸の帽子をかぶせてくれるんですよ。

清水；現在、松永さんにとって赤い靴はどんな存

在になっていますか。

松永：おかげさまで皆様のご協力もあって夢が叶いできあがりました。皆様に感謝しています。

数年前に１００歳で亡くなった三笠宮崇仁親王（みかさのみや たかひとしんのう）という方がおられましたよね。除幕式のときに、その殿下から金田一春彦先生を通して「なぜ自分は呼ばれないのか。発案者に会いたい」と言われたというんですね。

三笠宮様は「童謡の宮様」といって、幼少のころから童謡の作詞をされていました。たとえば「砂糖」とか本居長世が曲を付けた「月と雁」とか。それらはレコードにもなっています。それでお会いしました。

亡くなった三笠宮寛仁親王（ともひとしんのう）とは友達になっていまして、よく電話がかかってきて今日飲みに行こう、なんていって誘われるんですが、私は全然飲めないんですよ。紹介者によると、「あの殿下はいろんなところに飲みに行ってお金を借りている」っていうんですよ。「もし飲みに行ったらお前が全部払わなければいけない」と。ですから、ずっと「飲めない」「飲めない」と言っていたんです。そしたら、そのうちに言わなくなりました。

そのお父さまのところにお会いしに行ったんです。でも、こういう所に皇族が出てくるのは難しいんです。除幕式においでいただくことはできませんでしたが、こんなお言葉をいただきました。

「あなた方は素晴らしい像をつくった。これで私の好きな赤い靴もいつまでも歌い続けられる。ありがとう。横浜へも多くの人が訪ねてみえるでしょう」

清水；時間が無くなってきましたので、この辺でご質問のある方、どうぞ。

男性：お名前が「春」さんということで、おしゃれな感じですが、どういう由来があるのでしょうか。

松永：私の大叔母がイギリス人と結婚しまして、明治時代です。当時は外国人と結婚するのは悪い女だと言われていて、二人はハワイに行って仕事をしていました。そして時々日本に帰ってくるわけです。４月に帰って来た時に、ちょうど私が生まれたそうです。

それで、その外国人に名前をつけてくれ、と言ったら、「そりゃあ簡単じゃないか。日本では正月のことを春っていうじゃないか。だから春にしよう」となったそうです。

でも、それからが大変だったのです。父親が届けるために中区役所に行きました。そしたら、「この名前はいじめられるから良くない。女の名前だからやめた方がいい。受けられない」と係員に言われたんです。現代なら男でも春という人はいますよ。外国人でもハルという名前はあります。

「でも、名前を付けてくれた人がいるんです。その人に失礼だから春で受けてくれ」と言ったら、「いや、私は受けられない」と拒否するわけです。「じゃあ、なんていう名前がいいんですか」と訊くと「春に馬と書いて春馬なんかどうだ」と。

それで仕方ないから「じゃあ、あんたに任せるよ」と役人に言ったんです。自分は他に用がありそれを済ませて戻ってくるから、それまでに考えておいてと。そしたら課長や誰かと相談したんでしょうね、戻ってきたら「できました」と言うんです。「春に秀吉の吉を付けて、春吉（はるよし）にした」と。

「はるきち」とすると田舎の爺さんみたいになっちゃいますから「はるよし」なんです。だから正式には松永春吉なのですが、私は松永春を使っています。名付け親はイギリス人です。

清水；ほかにご質問のある方、いらっしゃいますか。

今回は山下公園につくられた赤い靴像のお話でしたが、実はこの像、横浜駅と海を渡ったアメリカのサンディエゴにも建てられているんですね。

ということで、来年度にも松永さんにおいでいただき、その辺のお話をおききしたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。

【了】